

# 小松杏里のくるめ演劇塾 2018 後期・講師紹介



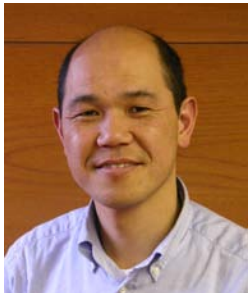
小松杏里 [こまつ あんり]◎久留米シティプラザ ドラマアーツ・ディレクター・劇作家・演出家／プラザクラス担当]

東京都出身。76年、明治大学在学中に演劇舎螳螂(とうろう)を結成、80年代小劇場演劇界の中で人気を博す。92年、神奈川を拠点に演劇プロジェクト月光舎を組織、北九州演劇祭参加や大阪・名古屋・ソウル公演なども行い、2002年には韓国現代戯曲ドラマリーディングでチャン・ジン作『無駄骨』を演出、以降、韓国の演劇界と交流を深める。2003年から3年間、福岡の声優タレント専門学校に講師として赴任、九州の演劇界と交流を持つ。2015年久留米シティプラザのドラマアーツ・ディレクターに就任、2016年より「小松杏里のくるめ演劇塾」を開講、塾長を務める。



岸井大輔 [きしい だいすけ]◎劇作家・多摩美術大学演劇舞踊デザイン学科非常勤講師／特別ゼミ担当]

1970年東京生まれ。1995年より、他ジャンルで追求された創作方法による形式化が演劇でも可能かを問う作品群を制作している。2003年から2007年にかけて、各地で散歩する演劇『POTALIVE』を制作、2009年から2012年に、東京都と共催で、ハンナ・アーレントの『人間の条件』をテーマに、公共を上演するプロジェクト『東京の条件』を行う。2013年より福島県いわき市を舞台に龍を巡る信仰をつなげることで被災地の巡礼コースを立ちあげる『龍燈祭文』を実施中。代表作「好きにやることの喜劇(コメディ)」 「始末をかく」



永山智行 [ながやま ともゆき]◎劇団こぶく劇場代表・劇作家・演出家／特別ゼミ担当]

1967年宮崎県都城市生れ。劇作家、演出家。宮崎県内の三股町立文化会館をフランチャイズとする劇団こぶく劇場代表。2001年『so bad year』でAAF戯曲賞を受賞。同作をはじめ、戯曲は劇団外での上演も多く、2005年に東京国際芸術祭参加作品として書き下ろした『昏睡』は、2009年には神里雄大(岡崎藝術座)演出により上演された。また地点の演出家・三浦基との共同作業として、『お伽草紙／戯曲』『Kappa／或小説』なども執筆。2006年から約10年間、公益財団法人宮崎県立芸術劇場の演劇ディレクターを務め、九州で活躍する俳優たちを集めてのプロデュース公演「演劇・時空の旅シリーズ」を企画・演出するなど、地域における演劇の質の向上と広がりを願い活動している。



池田美樹 [いけだ みき]◎劇団きらら代表／特別ゼミ担当]

熊本市出身。1985年、劇団きらら旗揚げ。以降、劇団の全作品の作・演出をつとめ、公演活動以外にも、学校でのワークショップ講師・イベント演出・CMナレーションなど多方面で活動。2005年第40回熊本県文化懇話会新人賞受賞。2014年「踊り場の女」が第14回AAF戯曲賞最終候補作ノミネート。「ほくの、おばさん」で2015年に北海道戯曲賞優秀賞、2016年に王子小劇場(東京)・佐藤佐吉賞最優秀脚本賞受賞など。日本劇作家協会九州支部事務局長。熊本演劇人協議会副会長。ものづくりの信条は「美しいのに愛嬌もあり」。



川口大樹 [かわぐち だいき]◎万能グローブ ガラパゴスダイナモス脚本・演出家／特別ゼミ担当]

1983年福岡県出身。2001年、大学進学とともに友人らと劇団を旗揚げ、役者として活動を始める。2004年、万能グローブ ガラパゴスダイナモス結成より参加。2005年3月、第0回公演「ザ・グラマーボーイズ」で自身初となる長編脚本・演出を担当。以後、劇団公演のほぼすべての脚本・演出を担当。暗転なし、リアルタイム一幕コメディを得意とし、人間同士の会話、そのズレから起こる関係性と張り巡らせた伏線の「笑い」にこだわったシチュエーションコメディの作風で、幅広い観客層から支持を得ている。2011年より、福岡内の専門学校やタレント事務所等、外部での演技指導を担当。高校演劇の夏期ゼミの指導や大会の審査員も務めるなど、次世代の演劇人たちとの交流にも力を注いでいる。